

児童養護施設 慈愛園子供ホーム 2022 年度 事業報告

1 総括

慈愛園子供ホームは、2022 年度も「子どもの最善の利益」のために「子どもの権利」を真ん中に養育実践し、以下の 5 つのことを掲げ取り組んだ。

- 1 全ての子どもが、神様に愛される存在である（キリスト教養育）
- 2 子ども中心の生活を創造する（利用者中心主義）
- 3 家庭と同じ機能を果たすようにする（ホームシステム）
- 4 福祉専門機関として、地域の様々な働きに協力する（施設の地域貢献）
- 5 社会と時代の要請に応える仕事を開発する（パイオニア精神）

まずはコロナ禍において、コロナ陽性児童及び職員、クラスター発生時、加えて児童及び職員の濃厚接触者への対応に追われながらも一年を通じ日常的に感染防止と感染拡大に随時取り組むことができた。また、児童に関わる活動は多少緩和され、養育に必要な行事は感染予防対策を取り計画実行することが出来た。

次に入園児童虐待の増加と共に発達障害など養育困難な児童も増えている。養育スキルの向上の必要性を強く感じている。措置ケースが減り、一時保護が長期化している。措置されるケースでは、高齢児童が増え、成育歴が複雑で養育に職員の専門性が問われている現状があった。性的な問題での対応については、早期対応と効果的な介入により再発を防ぐことが出来た。

今後、措置改正児童福祉法により児童養護施設を取り巻く法制度改革の流れの中で経営及び運営の見直し、人材の確保と育成は大きな課題でもある。

2 主な取組とその評価

（1）子どもが安心して安全に安定して暮らせる落ち着いたホーム運営

- 子どもが思いやりを感じられる生活ができるように職員のさりげない目配り・気配り・心配りに取り組んだが、きめ細やかさに欠けている部分も多く出来ていない。これからも手厚い養育、児童との愛着形成に全職員で取り組む。
- 人権意識の高揚に努めているが、職員・児童ともに浸透できてない。朝の礼拝や 聖書を通して人権に関わる学びの機会を有効活用していく。今後、児童のアドボケート（意見表明）への取り組みを進める。

重点目標	評価	実績等
子どもが安心して安全に安定して暮らせる落ち着いたホーム運営	△	・子どもが思いやりを感じられる生活ができるように職員のさりげない目配り・気配り・心配りに取り組んだが、きめ細やかさに欠けている部分も多く出来ていない。 ・人権意識の高揚に努めているが、職員・児童ともに浸透できてない。

◎達成できた、○ある程度は達成できた、△（あまり）達成できなかった（以下同様）

（２）子どもの課題や問題に向き合う職員のチームアプローチと関係機関との連携

- 児童の成長発達につながる関係機関（医療・教育分野）との連携は出来た。
- 児童間性問題には「予防」・「早期発見」・「効果的介入」の視点から包括的対応が出来ているが、児童の問題行動（児童間暴力・飛出し・無断外出・無断外泊など）には緊急な対応に迫られた。
- 児童が安心して安全に安定して暮らせるためには、各職員の専門性を活かしかつ職員の連携を高める必要性を強く感じる。児童の養育に携わる職員の支援・援助のスキルアップ研修と組織的支援・援助体制作りが急務である。

重点目標	評価	実績等
子どもの課題や問題に向き合う職員のチームアプローチと関係機関との連携	○	・児童の成長発達につながる関係機関（医療・教育分野）との連携は出来た。 ・児童間性問題には「予防」・「早期発見」・「効果的介入」の視点から包括的対応が出来た。

（３）施設経営の安定と当事者意識の高揚 ～変化とニーズに対応できる財政基盤作り

- 加算制度や補助金事業の活用と充足率 90%以上（暫定回避）を維持でき、財源確保ができた。法人からの借入金返済は計画的に進み、財政的には安定した経営ができたと考える。

重点目標	評価	実績等
施設経営の安定と当事者意識の高揚	◎	・加算制度や補助金事業の活用と充足率 90%以上（暫定回避）を維持でき、財源確保が出来た。 ・法人からの借入金返済は計画的に進み、財政的には安定した経営が出来たと考える。

（４）地域福祉の推進 ～地域の子育て支援の担い手として

- 「砂取地区シルバーおせち宅配便」と「ほっとネット砂取」が３年ぶりに再開され、地域交流と子供ホームとして協力出来たのは大きな喜びである。今後、地域交流事業が

コロナ禍前の状態に戻り児童との豊かな交流ができることを願いたい。

- ショートステイを受け入れて地域の子育て支援が徐々に出来つつある。

重点目標	評価	実績等
地域福祉の推進	○	・「砂取地区シルバーおせち宅配便」と「ほっとネット砂取」を3年ぶりに再開した。 ・ショートステイを受け入れて地域の子育て支援が徐々に出来つつある。

(5)コロナ感染症対策

- 児童に関わる活動は多少緩和され、養育活動に不可欠な行事は感染予防対策を取り、子供ホーム単独で計画実行し、行事を通しての児童の支援を行うことが出来た。
- コロナ陽性者が発生した場合には、モードホームで特定の職員が児童に対応し、感染拡大を防ぐことが出来た。
- 地域小規模ホーム（アンディ）での陽性者発生時には、職員と隔離等の感染対策がとれたためホームでの対応を試み感染拡大を防ぐことが出来た。

重点目標	評価	実績等
コロナ感染症対策	○	・養育活動に不可欠な行事は感染予防対策を取り、子供ホーム単独で計画実行し、行事を通しての児童の支援を行うことが出来た。 ・コロナ陽性者が発生した場合には、モードホームで特定の職員が児童に対応し、感染拡大を防ぐことが出来た。 ・地域小規模ホーム（アンディ）での陽性者発生時には、職員と隔離等の感染対策がとれたためホームでの対応を試み感染拡大を防ぐことが出来た。

3 措置入所児童数(一時保護を含む、サービスの利用状況)

(1)子供ホーム本体及び地域小規模ホーム

- 2022年度も毎月1日付の措置児童数の充足率を暫定基準90%以上クリアすることを目標としてきた。充足率が増えない要因の一つが県枠措置数と市枠措置数の取り決めがあり、県からの措置依頼があっても市枠を県枠に譲ってもらえず、措置入所に至らないこともあった。また、今年度は就学前児童の措置依頼（13件）があったが、就学前児童の入所率が100%で受入れが出来なかった。次年度（2023年度）はエスターホーム職員を6名とし、就学前児童の受入れが出来る体制を整えている。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
本体	39	40	40	39	39	39	40	40	40	40	40	40
一時保護	1	0	1			2		2				
地域小規模	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
合計	52	52	53	51	51	53	52	54	52	52	52	52
充足率	91	91	93	89	89	93	91	95	91	91	91	91

(2)モードホーム(コロナ陽性者及び濃厚接触児童受入施設)運用とコロナ発生について

- コロナ発生時における子供ホーム児童の隔離（ゾーニング）では、有効的な活用ができた。補助事業施設であるため、熊本市からのコロナ陽性児童の受入れは職員の配置を含め課題も多いが、2022年度の受入れはなかった。コロナ陽性者が自宅での療養に方向転換していると考えられる。モードホームの利活用に関しては、コロナが2類から5類への引き下げに伴い、市児相と連携協議し、子育て支援事業につながるように取り組む必要性も感じる。

・モードホーム運用実績

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
子供ホーム 児童	1		1		1	13			1	2			19
一時保護 市児相委託													
合計	1		1		1	13			1	2			19

4 苦情・学校等への対応の状況

(1)砂取小学校からの連絡と連携

- 特別な支援や合理的な配慮が必要な子供ホーム児童が、授業妨害や教師への暴言・暴力を行ったり、学校を飛び出すケースが多々あった。その度毎に学校から連絡が入り、職員が学校へ出向き教室や保健室でクールダウンさせ授業に再び復帰することもある。

ば、そのままホームに児童と一緒に帰る場合もあった。学校側には多大なるご迷惑をおかけした。今後も小学校とは児童の背景など丁寧に共通理解を図りながら連携に努める。

(2)ホーム飛び出し

- ・ 中学2年女児が山鹿方面に自転車で向かい山鹿署で2回保護される事案が発生した。直ぐに警察に行方不明届を提出し、直ぐに居所が分かり最悪の事態に至らなかった。特に2回目は、他の児童2名を誘ってホームを飛び出した。その2名は植木交番で保護された。些細なことが原因で衝動的に福岡方面に行きたいと思い飛び出している。SNSで知り合った男性が福岡にいることも飛び出しの原因であった。
- ・ 小学3年男児が宇土松橋方面に自転車で向かい一度目はメガネのヨネザワ近見店で保護、2度目は熊本南署で保護されている。家に帰りたい一心での行動でゲームをはじめ自由にできる環境を求めている行動である。2度目は小学3年女児を誘って飛び出している。

(3)自傷行為が多発

- ・ 自傷行為が多発し、ホーム職員と心理士はじめ全職員でその対策を協議し取り組んだ。その中で、中学1年男児が学校内で友人関係のトラブルから学校内で自傷行為を行い入院の措置をとった。自傷行為の連鎖が発生しその対応と対策に日々を送った。子どもたちに寄り添い話を聴いてあげることの重要性を強く感じた。
- ・ 一つのホームで児童の自傷行為が連鎖し、6名の児童に広がる案件が起き、児相と緊急で協議を開き、今後の対応について支援の役割分担を行った。

(4)高校生の度重なる指導事案による進路変更

- ・ 高校1年男児が単位を履修できず進路変更(くまもと清陵高校編入)することになった。原因は基本的な生活習慣が身につかず遅刻や欠席が多く欠課時数オーバーした為である。職員の指導励ましが届くことなくこのような結果となった。自分で決めた進学先を卒業するまで続けてほしかったという思いが残る。

5 主な行事

- コロナ禍の影響で予定されていた行事が中止され、特に地域との交流行事が実施できなかった。式典やクリスマス等関連行事をはじめ、三密を避け消毒や換気を行い、コロナ感染対策を取り子供ホーム単独での行事を計画・実施した。

(1)式典・クリスマス等関連行事

- ①進級式 4月4日(月)
- ②イルミネーション点灯式 11月26日(土)
- ③クリスマス祝会 12月18日(日)

- ④砂取地区シルバーおせち宅配便 12月31日(土)
- ⑤正月祝膳 1月1日(日)
- ⑥卒園式 3月19日(日)

(2)体験活動・体験学習

- ①いちご狩り農業体験 5月14日(土)
- ②なす収穫・植え付け農業体験 6月26日(日)
- ③七夕まつり 7月3日(日)
- ④海水浴体験 7月28日(木) ※夏休みグラウンドで子どもプール開放
- ⑤芋ほり農業体験 10月16日(日)
- ⑥みかん狩り農業体験 11月12日(土)
- ⑦園内バーベキュー（デイキャンプ） 1月5日(木)

5 研修の実施及び参加状況

(1)園内義務研修実施

- ①ハラスメント研修
- ②衛生研修
- ③防犯研修

(2)研修会への参加

- ①日本キリスト教児童福祉連盟 4月10日
- ②児童福祉施設指導者合同研修 6月9日
- ③九州児童福祉施設職員研究大会 8月2日
- ④スーパーバイザー養成研修会 8月31日～9月1日
- ⑤キャリアパス研修（管理職員コース） 9月7日～8日
- ⑥子どもの虹研修 9月9日
- ⑦県児相研修「支援職が困る子どもの症状について」 9月28日
- ⑧感染症研修「ゾーニングについて」 9月30日
- ⑨ケアワーカー部会研修 10月12日
- ⑩県養護協議会新任職員研修 10月15日
- ⑪生計困難者レスキュー事業研修会 10月15日
- ⑫社会福祉法人労務研修会 10月22日
- ⑬全国養護協議会施設長全国大会 10月14日～15日
- ⑭全国児童家庭支援センター研究協議会 10月26日～27日
- ⑮相談援助部会研修会 11月2日
- ⑯福祉サービスにおける苦情への対応研修 11月26日
- ⑰社会福祉法人実務研修会 11月30日
- ⑱ビジネスマナー研修 12月1日

- ①⑨看護協会研修 12月1日
- ①⑩県養護協議会性教育研修 12月13日
- ①⑪SBI 児童養護施設職員研修 1月22日～24日
- ①⑫日本箱庭療法学会研修 2月11日
- ①⑬ケアワーカー部会研修会 2月14日
- ①⑭県養護協議会機関連携研修 2月16日
- ①⑮問題行動に関する研修会 2月25日
- ①⑯第5回 FLEC フォーラム 3月11日～12日

6 施設整備等

本年度は次の事業及び補修を行った。児童が日常生活する場であるため、修理補修が必要な箇所が発生している。職員が修理補修できる場合はその都度行い、困難な場合は業者依頼をしている。10万円以上の事業及び修理補修費が見込まれる場合は2社以上に相見積もり書を依頼し業者選定を行うようにして、経費の削減とより良い環境改善に取り組んできた。

(1) 熊本県新型コロナウイルス感染症緊急包括支援事業(10/10 補助)

補助額 7,527,000 円

- ①職員への慰労金 6,101,000 円
- ②抗原検査キット、マスク、ガウン、消毒液他 1,426,000 円

(2) 環境整備・営繕費及び補修

- ・ネット環境整備費用 138,710 円
- ・ノーマンホーム(園内保育所)中庭テラス改修 120,000 円
- ・児童センター雨漏り修繕費 350,000 円
- ・エスターホーム玄関補修費他 340,000 円
- ・ホーム居室畳張替え代 153,340 円
- ・空調修理費 251,872 円
- ・末吉商会 153,450 円
- ・畳替え 490,050 円
- ・児童センター内部塗装、天井張り替え 910,000 円
- ・ノーマンホーム中庭床、屋根修理 660,000 円
- ・ノーマンホーム床張り替え 395,000 円
- ・井戸滅菌取替工事 433,400 円

※ エアコン（GHP）の更新は補助金活用で申請したが認められず、別の補助金を活用し2023年度へ先送りした。今後も施設・設備の経年変化と老朽化が目立ってきているので、修理補修と改修及び設備投資に優先順位をつけて計画的に取り組んでいく必要性を感じている。